

# 博士論文の要約

氏 名 宋 琦

論文題目 江戸時代中後期における神儒仏三教思想——形態と構造の分析を中心に——

本論文は、江戸時代中後期の神儒仏三教思想を主な研究対象に据え、その個別事例の形態分析を積み重ねることで、神儒仏三教思想の全体構造を抽出・考察するものである。近代以前の日本の思想空間において、神道・儒教・仏教は、最も重要な三つの学問体系だと見做されていた。とりわけ江戸中期以降、それら三教が鼎立したり習合したりといった多くの事例が出現することとなる。神儒仏三教思想の研究は江戸時代の思想史における重要な一環として意義が大きい。

中国では儒仏道の三教思想については広く知られており、それに関する研究蓄積も豊富である。しかし、多くの場合、三教思想は中国ばかりではなく、日本にも存在したことが看過され、日本の三教思想を正面から扱った研究は極めて少ないのが現状である。日本という一国の思想史にとどまらない広い視野で神儒仏三教思想を再評価するためには、その思想的な形態と構造とが明らかにされる必要がある。江戸中期以降、神儒仏三教思想は、様々な領域でほとんど時を同じくして出現し、鼓吹され、ときには批判を浴びることもあった。神儒仏三教思想の全体像を把握するためには、異なる領域でそれがどのように解釈されたかを理解することが重要である。その手掛かりとして、本論ではまず、同時代を生きた三人の人物、松宮観山（一六八六～一七八〇）、石田梅岩（一六八五～一七四四）、白隠慧鶴（一六八六～一七六九）による神儒仏三教思想を検討する。その上で、彼ら以外の神儒仏三教思想についても言及し、江戸中期以降の思想的見取り図を描く。以上の作業から、江戸中期以降の神儒仏三教思想の全体構造を明らかにし、日中の三教思想の異同について比較研究を試みる。各章の具体的な内容は、以下のとおりである。

第一章では、松宮観山の神儒仏三教思想を取り上げる。松宮観山は北条流兵学の継承者で、彼は国体論の角度から三教思想を論じた。そこでは、「教」と「道」との緊密な関係のなかで三教思想が展開され、神道を中心とする神儒仏三教思想が謳われた。晩年、観山は明和事件で死罪とされた山縣大弼と書簡を交わしたことで、江戸追放の憂き目を見るが、そうした経緯から、明治以降、尊王の人物として評価されることとなった。そこから「日本魂」の代表的思想家と見做されてきた松宮観山の神儒仏三教思想は、近代に創出された「日本人」としてのアイデンティティ、さらには後の国家神道の支柱となっていたことが分かる。

第二章では、石門心学における神儒仏三教思想について考察する。江戸期の民衆世界は習合思想と密接なつながりがある。石田梅岩が提唱した石門心学は、民衆教化のなかで神儒仏三教思想を取り入れた。彼の思想において中心の地位を占めるのは神道だが、理論的な支えとなっているのは儒教である。梅岩の思想を要とする石門心学は朱子学の特徴を有しているが、実践面では陽明学の特徴を持ち、中国・明末の「三一教」に類似する民衆向けの教化運動だといえる。簡易な言葉で教えを説くことで、明治期以降も全国に影響を与えることとなった。こうした心学の神儒仏三教思想は、民衆の道徳、信仰などの理論的な

根拠となったと見做されている。

第三章では、白隠禅師と東嶺円慈の三教観を取り上げる。研究史上では、近世仏教は墮落した仏教であるという議論が支配的であったが、実は、影響力のある僧侶を輩出した時代であった。臨済宗中興の祖としての白隠禅師は、宗派の正統的な法脈を継承しつつ、日本臨済宗のあらたな局面を創出した。彼は公案禅を再興し、道教の内丹法を運用して「軟蘇の法」という座禅法を広めた。彼は宗門のちがいには寛容な態度を示し、中国の宋明禅から三教一致の概念を受容した。その三教観は主に中国式の儒仏道であったが、弟子の東嶺円慈は白隠の寛容な思想的態度を継承し、明らかな神儒仏三教思想を唱えた。彼らの神儒仏三教思想は、信仰の場での思想の融合現象と考えられる。

第四章では、以上の三名以外の神儒仏三教思想に網羅的に目を配り、江戸中後期における、神儒仏三教思想の見取り図を描く。まずは二宮尊徳と大原幽学を取り上げ、農村の復興における神儒仏三教思想の形態を分析し、つづけて、武士道と三教思想との関係を考察する。神儒仏三教思想の擁護者は、士農工商のいずれにおいてもみられた。しかし、合理主義や自然科学的見地から神儒仏三教思想を否定する人物もいた。その代表として、富永仲基や山片蟠桃が挙げられる。さらに、神儒仏三教思想の内部構造を解明するため、神道・儒教・仏教それぞれの視点で江戸中後期の神儒仏三教思想のメカニズムを考察した。そして、以上の研究を踏まえ、日中の三教思想の比較を行った。思想の形態と構造という観点から見たとき、日中両国の三教思想は互いに異質なものである。そのなかで、テキスト研究の補助として、絵画資料である「三教図」を研究対象に、神儒仏三教思想の視覚的な表現方式を考察した。

さらに、補論として、神儒仏三教思想研究において「宗教」という概念がどのように扱われてきたか、分析を行った。今日の日本では、多くの人々の宗教観は曖昧なものだといえる。時代を溯れば、一八九三年に開催されたシカゴ万国宗教会議には、神道・儒教・仏教・道教などの代表者が出席した。西欧社会で生み出された宗教概念は、アジア諸国に持ち込まれるにおよんで、きわめて広い範囲で使われるようになった。しかし、中国古典籍における「宗教」の用例をひもとくと、近代の「宗教」概念よりさらに豊富な意味を持っていたことがわかる。「三教」もまた古来より使用されてきた言葉だが、「宗教」の融合という意味とは異なる。端的に言えば、三教思想は宗教概念以前の前近代に出現した思想であり、したがって、宗教の習合現象と見做されるのは不適切なのである。これは三教思想研究を大きな前提をなすものである。

以上の検討を踏まえて、本論文では以下のような結論が導かれた。三国世界観は、仏教の世界観に基づいて日本で派生したものである。日本・震旦・天竺が並べられることで、三国それぞれに対応する神道・儒教・仏教を並列のものとして考える可能性が見出されたといえよう。日本の神儒仏三教思想は、東アジアにおける文化的交渉、とりわけ日中の文化交流のなかで、長い時間をかけて形成された思想である。このような神儒仏三教思想は、江戸時代以前にはおよそ形成されていたが、江戸時代になると、幕府の政策や文化活動などの影響を受け、江戸中期以降、普遍的な思想体系となっていた。

神儒仏三教思想は江戸時代に最盛期を迎えたが、現代の社会にも影響を与えている。今日の日本人の宗教観は曖昧なものである。神道・仏教・キリスト教といった諸宗教が、日本社会のなかで共存している。これら三教を習合させようという意志はほとん

どみられないが、人々の認識に、信仰の世界で異質なものを排除しないという思想的な慣習が残っている。ここでは、「一神教」と「多神教」との区別についての論議が連想される。仏教・道教・神道・儒教などを「多神教」として理解すれば、三教思想はそうした「多神教」の外部にもう一つの「多神教」の輪郭を描いたと考えられる。このように、東アジアの信仰世界には自由な雰囲気が出、多彩で多様な諸側面を見出せる。